

黒田官兵衛と井上周防⑫

軍師官兵衛の最後の輝き

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

1600(慶長5)年9月13日の石垣原合戦の勝利は、西軍側に、黒田強しのうわさが現実であることを知らしめた。西軍諸城は、城主率いる主力部隊が大坂に出陣し、留守部隊であった。黒田勢に野戦で対抗する兵力は無く、籠城でしのぐしか道はなかった。籠城の将兵は、黒田勢の侵攻に戦々恐々としていたのである。

九月中旬、黒田如水(官兵衛)率いる黒田勢の快進撃が始まった。正に破竹の勢いであった。17日に9千余の兵力で豊後国東郡に侵攻し、熊谷直盛の居城安岐城(大分県国東市)を攻めた。直盛は大坂に出陣中で留守居が守っていたが、19日に降伏したのである。同日、毛利高政の支城角牟礼城(大分県玖珠町)が降伏した。23日には垣見一直の居城富来城(大分県国東市)を攻めた。一直は大坂出陣中で、10月2日に降伏開城したのである。

9月15日の関ヶ原合戦で東軍が勝利したが、その情報は同月下旬に九州に達したとされている。一説に如水が九州で天下取りを目指したとするが、この時点で潰えたことになる。しかし、如水の西軍攻めは続くのである。

10月4日、徳川家康の要請で、太田一吉の居城臼杵城(大分県臼杵市)を接收し黒田の城番を入れた。臼杵城は、豊後岡城主中川秀成が西軍加担の疑いを晴らすため、関ヶ原後に猛攻し多大な犠牲をだして開城させた城である。続いて、毛利吉成の居城小倉城(北九州市)と支城の香春岳城(福岡県香春町)を攻めた。小倉城攻めは、家康の要請であった。小倉城は、伏見城攻めで多数の家臣が討死し、混乱していた。また、香春岳城も城主の相続問題で主家と対立していた。これに乗じて、19日には両城を開城させたのである。この時点で、如水は豊前・

豊後の2ヶ国を平定したことになる。占領は、単に城を押さえただけでなく、領地の実行支配をしていたのである。

さらに、降伏した将兵を戦力に加え、筑前秋月を経て筑後に進出した。筑後では熊本に加藤清正、佐賀の鍋島直茂と協力して、毛利秀包の久留米城(久留米市)、立花宗茂の柳川城(柳川市)を開城させたのである。次は薩摩の島津氏攻略である。11月12日、3者の軍勢が水俣(熊本県水俣市)まで進出したとき、徳川家康の停戦命令が発せられた。如水はこれに従い、豊前中津に軍を帰したのである。

如水の2ヶ月に及ぶ合戦は、「軍師官兵衛」の最後の輝きであり、世間に官兵衛の実力を再認識させたのである。一説に、如水が天下を窺ったとするが、詳細は不明である。史料では、徳川家康の了解を得た一連の軍事行動だったようである。1600(慶長5)年9月15日付けで如水が藤堂高虎に当てた文書には、小倉城を押

さえたら加藤清正とともに関門海峡を渡り、広島を攻めるとしている。また、清正と如水が西軍から奪取した所領が2人に押領されるよう家康への口利きを要請。さらに、黒田長政には関東での領地押領を願い、如水とは別々の家として領地押領を望む旨記されている。これは、東西対立の中、全国で起きた領地拡張競争と同じである。官兵衛の最後の輝きは、秀吉とともに駆けた戦国時代の再来だったのであろう。



▲井上周防(九郎右衛門)の菩提寺龍昌寺の山門